

和歌山県立 自然博物館

はじめに

シダは、地球の陸上植物の出現からやや遅れて3億5000万年前のデボン紀にその最盛が見られ、それ以前に遡ると現在のマツバランに似た、茎に根も葉も無い単純な植物となる。

人間の出現から途方もなく遠い時代から地球の緑を支え、一昔前までの豊かな自然を育んで、今、人類の発展と、その近代社会（石炭、石油に支えられた）の発展に、なくてはならない存在（資源）であったといつても過言ではないだろう。

またそれを身近に感ずる人がどの位いるだろうか。日本人には馴み深い正月のウラジロ、軒先に下るシノブの盆葉、夏の蕨餅から、その祖先の栄えた地質時代を垣間見る。生き物の進化の段階で生物が私たち人間社会に残した遺産資源と自然を、次の時代にその恩典を受けた人類が、何を残す事ができるだろうか。物言わぬシダを見詰めながら深く考える必要にせまられる。地球の環境を、今、考える時代でもある。

和歌山県立自然博物館
館長 辰喜 洋

目次

| | |
|--------------|----|
| シダ植物とは | 1 |
| 和歌山にゆかりのあるシダ | 5 |
| シダの名前 | 8 |
| シダの分布 | 11 |
| くらしのなかのシダ | 14 |

表紙写真

コシダ

日当たりのよい、やや乾燥した場所に群生するシダで、ウラジロに似ていますが、次々に2又に分かれて独特の葉の形をしています。

裏表紙写真 ツクシ

ツクシはスギナのある場所に見られます。ツクシとスギナは別々のものではなく、地下でつながっています。スギナは養分を作る働きをして、ツクシは頭の部分で胞子を作っています。

シダ植物とは

(1) 古い歴史

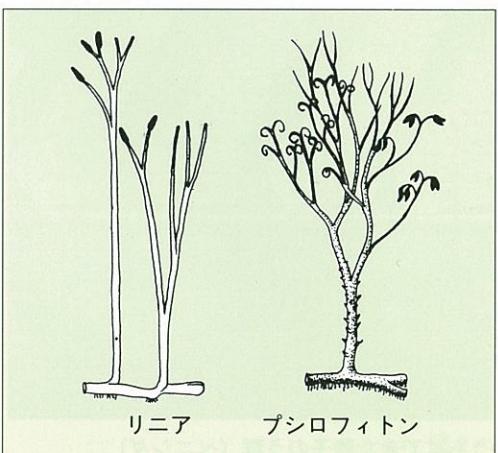
シダ植物は気が遠くなりそうなくらい古い歴史を持っており、化石がそのことを教えてくれます（図1）。最初のシダ植物は、約4億年前にあらわれたリニア、プロフィトンのような原始シダ類と考えられています。写真に見られるマツバランは、岩上などにまれに見られますが、根がなくて茎は2つに分かれています。リニアのなかまと似ていて、最も古い陸上植物の子孫の生き残りと考えられています。

これ以外にもヒカゲノカズラやスギナ、トクサのようなシダ植物は今でこそ高さ、茎の太さともに小型化していますが、祖先をたどっていくと、3億年以上の昔、古生代の石炭期と呼ばれる頃は、直径が50cm、高さが15~30mにもおよぶ木性のシダ植物でした。そしてこれらのお化けのような植物でおおわれた一大森林が広がっていたと考えられています。この森林が土の中にうもれて変化してできたものが石炭であるといわれています。



図1 シダ植物のたどってきた道すじ（系統）

（これらのシダは古い時代の名残をとどめて、現在もはそばを生ぎています）



▲マツバラン